

中学生の皆さん、スローガンについて説明します。

今年度のスローガンは「人の喜びを幸せに感じられる人」というもので、風変わりなスローガンだと思った人も多いと思います。昨年までの「凡事徹底」「利他共生」の2つのスローガンのうちの「利他共生」を推し進めたものですが、このスローガンにこめた意味はそれだけではありません。

私がずっとこだわってきたことをスローガンに込めました。私がこだわり続けてきたもの、それは物語です。物語の核心を一言で述べるとこの言葉になるのではないかと思います、このスローガンを掲げました。

話があまりにも飛びすぎていて、何を言っているかわかりませんね。順を追って説明します。

皆さんは今までの読書で、この本はすごいなあという本に出会ったことはありますか？

私は小学校、中学校と本を読む人間ではありませんでしたが、高校時代、島崎藤村の『破戒』という小説を読んでから、読書にのめり込んでいきました。野球をする中学生がメジャーリーガーにあこがれるように、サッカーをする中学生が欧州リーグのサッカー選手にあこがれるように、ドストエフスキーやトルストイ、ツルゲーネフ等に圧倒され、あこがれました。

少しでも文学作品に関わっていたいと思い、国語科教師になりました。国語科教師として、教室で数々の文学作品を扱ううちに「どうしたらあのような作品を書くことができるのだろうか」という問いが生まれてきました。作品を著した巨匠たちが「天才だから。」と言ってしまえばそれまでだけど、文学作品を内側からのぞいてみたいと思ったのです。

そんな時、ウラジーミル・プロップという人の「昔話の形態学」という本に出会いました。この本は、物語は物語に必要な働き（機能）の組み合わせでできている、と述べた本です。物語を部品に分解する本でした。革新的でした。RPGゲームが作られるようになったのも、コンピュータで物語が作成できるようになったのも、この本が著されたおかげです。

その研究が進み、アルジルド・ジュリアン・グレマスという人が「構造意味論—方法の探求」という本を書きました。物語は、主人公が送り手に依頼され、依頼された物を受け手に届けるという構造からできているというものでした。物語には、依頼された物の獲得を援助してくれる人と邪魔をする人が登場します。この構造は、昔、長老が若者に村を救うための物を獲得して来いと命じたことと同じ構造です。少年は村を救うために、旅に出て、村を救う物を獲得してきます。それが認められ、大人として認められるのです。他の人のために行動できることが大人として認められる条件です。つまり、物語は少年や少女が子どもから大人になる、そのことを描いたものなのです。

とても長い説明になってしまいました。

スローガンの「人の喜びを幸せに感じられる人」に込めたのは、人のために行動できるようになってほしいという願いです。それは皆さんが大人になってほしいという願いであり、それぞれの人生の主人公になってほしいという願いであります。

先生方は時に皆さんを援助する人ですが、皆さんに依頼をする人です。人生のミッションを与えられたら、教師冥利につきますと思っています。